

卑弥呼の残像（下）  
— 明清通俗文学作品に描かれた日本人女性と日本イメージ —

The Literary Afterimage of Himiko (3)  
— A Study of Japanese Women and Images of Japan in  
Ming and Qing Popular Literature —

遊 佐 徹  
YUSA, Toru

## 卑弥呼の残像（下）

——明清通俗文学作品に描かれた日本人女性と日本イメージ——

### The Literary Afterimage of Himiko (3)

——A Study of Japanese Women and Images of Japan  
in Ming and Qing Popular Literature——

遊 佐 徹

目次（承前）

6、『才子牡丹亭』における女性天皇への関心

7、『花月痕』の「逆倭」とその「女主」

#### 6、『才子牡丹亭』における女性天皇への関心

これまで進めてきた論述のなかでは、卑弥呼の名そのものを書き留める明清の通俗文学作品は、前稿（「卑弥呼の残像（中）——明清通俗文学作品に描かれた日本人女性と日本イメージ——」）で取り上げた清代後期の小説『玉蟾記』が唯一の例<sup>補注</sup>なのであるが、少々視野を広げて中国文学作品を眺め渡すとさらに卑弥呼の名とその中国人にとってのイメージに触れた記録を見付けることができる。

その記録とは、清の康熙、雍正の頃の人で、ともに安徽出身の「詩書世家」の出身である「学識広博」の呉震生と「名門望族」の出で幼い頃から文化的な薫陶を受けて育った妻の程瓊<sup>1</sup>が中国戯曲作品の名編のひとつに数え上げられる明、湯顯祖の『牡丹亭還魂記』に施した注釈、解説である『才子牡丹亭』のなかに見えるものである。

それは『牡丹亭還魂記』の第十九齣「牝賊」において、漢人でありながら金朝の禄を食み宋朝に敵対する盗賊の李全の妻で女丈夫の楊婆が歌い出す「六幺令」曲の一節に対する注釈、解説箇所<sup>2</sup>に現われる。以下、その箇所について説明してゆくことにするが、まずは「六幺令」曲の該当部分を引いてみる<sup>2</sup>。

#### 『牡丹亭還魂記』第十九齣「牝賊」

〈六幺令〉如雷喧闐、緊轅門画鼓鏦鏦。哨尖兒飛過海雲来。〈合〉好男女、坐当中、淮揚草木都驚動。

〈六幺令〉雷の如き闐の聲、守備固めし陣門に鼓聲しきりに響く。斥候が駆け行くは海東の彼方。

〈李全、楊婆合唱〉我等似合いの夫婦、陣中にしかと構えおらば、ここ淮揚は草木すら震え慄

かん。

この曲は、李全が宋攻略の一翼を担うことを期待され大金皇帝より溜金王に封じられたことを喜んだ楊婆が「買馬招軍（いざ軍備を整えん）」と意気込んだのちに唱い始めたものであるが、当の楊婆自身も梨花槍の使い手で「万人無敵」の女丈夫である<sup>3</sup>ため、「夫婦上陣、大有威風（夫婦して共に出陣せば、威風大いに地を払わん）」ということで、「好男女、坐当中、淮揚草木都驚動（我等似合いの夫婦、陣中にしかと構えおらば、ここ淮揚は草木すら震え慄かん）。」の合唱となったのであった。

さて、肝心の呉震生、程瓊夫妻による卑弥呼への言及であるが、それはその合唱の「好男女、坐当中」に対する濃密な注のなかに確認することができる。

この部分の注が目指しているのは、物語上の楊婆のリアリティの確認、つまり、男性に伍す、あるいは男性を凌ぐ能力、武力、権力を揮い得る女性の存在の証明である。呉、程瓊夫妻はその作業を『漢書』に拠って呂後の例をを引くことを皮切りに歴代の史書に数々の女傑の姿を探し出す形で進めてゆくのであるが、やがて搜索の範囲は中国の域外にまで及ぶことになる。そこでは男に代わり王として立つことになった女性の例が「新羅」、「波斯」、南蛮の「訶陵」<sup>4</sup>、海南の「扶南国」といった海外諸国の歴史のなかに見出されてゆくのであるのだが、なかでも紙幅を費やして言及するのが日本の例である。卑弥呼が姿を見せるのはその部分で、呉、程夫妻は『北史』を引く形で次のように記している。

倭国在大海中、魏時訳通中国、自云太伯之後、光武時遣使入朝。靈帝時<sup>ママ</sup>有女子卑弥呼為王、侍女千人、尤能以鬼道惑衆、呼死人復立。其宗女<sup>ママ</sup>台為王、出聽政、跏趺坐、大業時來貢、曰、聞海西菩薩天子重興佛法、故遣來学。

倭国は大海の中に位置し、魏の時に中国と交渉を始め、自らは呉の太伯の後裔と称し、後漢の光武帝の時に使者を遣わし入朝した。靈帝の時に卑弥呼なる女子があつて王となり、その侍者は千人を数え、とりわけ鬼道をもって人々を惑わす術に長け、死人の名を呼べば生き返えるのだった。その一族の女子の台が王となり、王宮に出て政務に勤しみ、その際の居住まいは胡坐であった。隋の大業年間に朝貢し、海の西におわす菩薩天子が佛法を再興したと聞いたので、使者を遣わし学びにきた、と称した。

上掲の部分に限ったことではないが、呉、程夫妻の注は博引傍証を旨とするものの、すでに指摘されているようにその引用には問題も多い<sup>5</sup>。本注を出典の『北史』の該当箇所と比較してみると、前者がかなり大胆な編集を受けたものであること、加えて引用に明らかな誤りもあることがよく判る。「大業時來貢」以下の記述については『北史』原文では大和政権成立後の「多利思比孤」の遣

使に関する記述<sup>6</sup>を強引に倭国の卑弥呼政権に接続させたものであるのでここでは除外するとして、いま対応する『北史』巻92「倭伝」の記述を確認すると次のようになる。

漢光武時、遣使入朝、自称大夫。安帝時、又遣貢、謂之倭奴国。靈帝光和中、其国乱、通相攻伐、歷年無主。有女子名卑弥呼、能以鬼道惑衆、国人共立為王。無夫、有二男子、給王飲食、通伝言語。其王有宮室、樓觀、城柵、皆持兵守衛、為法甚嚴。魏景初三年、公孫文懿誅後、卑弥呼始遣使朝貢。魏主假金印紫綬。正始中、卑弥呼死、更立男王。國中不服、更相誅殺、復立卑弥呼宗女台与為王。其後復立男王、並受中国爵命

両者を比較してみると、卑弥呼が駆使用する「鬼道」の内容を勝手に「呼死人復立（死人の名を呼べば活き返える）」ものと補ったり、娘の「台与」の名を「台」に誤っているところはともかく、呉、程夫妻が『北史』に拠って倭国を説明する際に男性に関わる情報を完全に消し去る処理を施していたことが判るだろう。

こうした処理を施した背景には、この研究でしばしば言及している中国域外における「女子国」の記憶が夫妻にあったことも注の記述から窺われるが、ふたりにとって卑弥呼（とその娘）が「好男女、坐当中」の正当性を証明するうえで格好の事例と映ったことは間違いない。

さて、呉、程夫妻は、「好男女、坐当中」に対する注において、『北史』に拠る倭国王、卑弥呼への注目後も日本の女性「王」の存在の事例を挙げ続けてゆく。その記述は、今度は『新唐書』巻220「東夷伝」中の「日本伝」の条に拠って進められてゆく<sup>7</sup>が、引用は例によって極めて大胆に編集されている。その方式とは、該書が列挙している、神武が初代天皇として即位して以降光孝天皇に到るまでの歴代天皇のうち女帝のみをピックアップするというものである。いまその部分の記載を注のなかから摘録すると以下のようになる。

- 1、仲哀死、以開化曾孫女神功為王
- 2、隋開皇末欽明之孫女推古立
- 3、開皇初王死、女孝明立
- 4、上元中王死、以聖武女高野雞為王

この4つの引用には、我々日本人の立場からすると看過し難い誤り——出典の『新唐書』に由来する誤記および引用者の不注意による誤記——が数多く指摘できる。すなわち、2の「欽明」は引用者による「欽明」の誤記、3の「孝明」は『新唐書』に由来する「孝謙」の誤記、4の「高野雞」は引用者による「高野姫」の誤記である。また、4つの引用の関係性を考えた場合、4で新たに即位

した「王」とは称徳天皇のことを指しているので3の孝謙（「孝明」）天皇の重祚と捉える必要があるのだが、『新唐書』にも引用者にもそうした認識は全くない。

このような数々の問題点は指摘できるものの、「好男女、坐当中」の事例を歴史のなかに探すという呉、程夫妻の作業の趣旨に立ち戻って考えれば、夫妻は確かに日本の皇統譜のなかに4名の女性の「王」を探し当てたことは事実でもある。しかしながら、この「事実」はまた、我々日本人に直ちに次のような疑問を抱かせるものともなり得るだろう。それは、光孝天皇の即位以前この4名以外にも女性天皇がいたのではないかという疑問である。具体的には皇極天皇を始めとして斉明天皇（『新唐書』では斉明天皇の異称である「天豊財（重日足姫尊——〔重〕以下は省略されている」と表記。なお斉明天皇は皇極天皇の重祚である）、元明天皇（『新唐書』では「阿用」と表記。元明天皇の諱の「阿閉」の誤記と考えられる）、元正天皇（『新唐書』には対応する記載なし）の4名をさらに数え上げることができるからである。

もちろん『新唐書』『日本伝』を記すに当たっては編纂者に詳細な日本の皇統譜を参照する機会は乏しかっただろう<sup>8</sup>し、清朝を生きた呉、程夫妻においても事情は大きく変わりがなかったと推察される<sup>9</sup>ので、夫妻による女性天皇のピックアップが4名に止まったのも致し方なかったと受け止めることも可能かもしれないが、実は、その「疑問」に対する解答は『新唐書』の記載を注意深く見返すことで簡単に得ることができる。

「疑問」を解く鍵は『新唐書』における「王」達の性別に対する記載の有無に見出すことができる。すなわち、先ほど「疑問」として挙げた諸女性天皇（対応する記載のない元正天皇を除いて）について『新唐書』は性別を示していないが、呉、程夫妻が挙げた4名に関してはいずれも「王」の「孫女」や「女」という説明が加わっているのである。つまり、夫妻は、日本における女性「王」の事例を『新唐書』から探し出す際に、頗る単純に「女性」と表記されている「王」のみを選び出したわけである。

この点にのみに注目すると、呉、程夫妻の日本の女性天皇に対する理解は甚だ中途半端なレベルに留まったことになるであろうが、他方で、夫妻の目的が、日本の歴史のなかに卑弥呼の後輩達を探し出すものであったことを思い返すならば、十分にその目的は達成されているといえるのかもしれない。

## 7、『花月痕』の「逆倭」とその「女主」

これまで進めてきた中国の通俗文学作品のなかに卑弥呼の姿を捜し求める作業は、結果としていずれもかなりマイナーな作品を対象とするものとなったが、次に採り上げる『花月痕』は、中国小説史上、中国文学史上にもしばしばその名を留める<sup>10</sup>一定の知名度を誇る作品である。

『花月痕』16巻52回は、清、嘉慶朝の末の嘉慶二十三年（1818年）に福建省の侯官に生まれ、道光、咸豊そして同治の3朝を生き抜き同治十二年（1873年）に亡くなった眠鶴主人、魏秀仁の手になる「狭

邪小説」である。「狹邪（狹斜とも書く）」とは、文字通りの意味が「狭く曲がりくねった路地」であるものの、「花街」、「花柳街」の謂いで通用している熟語である。従って、「狹邪小説」とは「花街に登場する人物と事件を全篇の主な根幹と」<sup>11</sup>する小説のことで、こうしたカテゴリーを構想し、また『花月痕』をそのカテゴリーに数え入れたのが魯迅であった。彼は『中国小説史略』の第26篇「清之狹邪小説」において『花月痕』を『品花宝鑑』、『青樓夢』、『海上花列伝』と並べて採り上げ、一定の紙幅を割いてその特徴を論じたのである<sup>11</sup>。以下、『中国小説史略』の魯迅の手になるあらすじも参考にしながら本作の展開をまとめることにしよう<sup>12</sup>。

東越の韋癡珠と富川の韓荷生はいずれも識学に溢れた才人であったが、都では栄達の道の得られぬことを悟り、それぞれ地方へと下りゆく。時に倭寇が連年沿海諸省を侵犯し、さらには粵西の巨寇、貝寿泉を使喚して金陵を占拠させるなどしたため太原は朝廷にとって枢要の地となっていた。荷生はその太原にて経略の明禄の幕友となり、癡珠もまた蜀行の計画を変更して向った太原で李総兵の幕下に招かれ、詩作を介して敬愛の情を抱き合うだけの間柄であったふたりの対面がかなうことになる。莫逆の友となった癡珠と荷生は当地でそれぞれ妓女と馴染みとなり、癡珠は秋痕を荷生は采秋を得る。癡珠と秋痕、荷生と采秋との関係は幾多の試練を乗り越えつつ深まっていたが、やがてその運命は明暗を大きく異にするものとなってゆく。癡珠は、才能を揮う機会もなく不遇のままに過ごし、秋痕を身請けすることもかなわぬどころか妻と幼弟を相次いで亡くすと病の床に臥すことになる。回族の叛乱を平定して太原に戻った荷生は、癡珠と秋痕の婚儀を執り行おうとするが、秋痕は養父母に連れ去られてしまう。秋痕はなおも血書をもって心変わりのないことを示すが、やがて癡珠は亡くなり、養父母の焼死によって太原に戻り得た秋痕もあとを追う。一方荷生は、一度は采秋の母によって結婚を阻まれながら無事彼女を妻に迎え、科挙に探花での及第を果たすや建威將軍に叙せられて津門に駐屯すると倭寇を連破し降伏に追い込む。しかし、貝寿泉のもとには蕭三娘等五妖が加勢に現われる。采秋は癡珠に縁のある俠女、柳春織より法術を授けられ日に日に上達をみせていたが、五妖が呉越を侵すに及んで朝廷は荷生、采秋等が組織する討伐軍を派遣すると五妖は滅び、貝も自死に追い込まれる。賊軍はなおも偽太子を立て抵抗するが先に降伏した倭人が捕らえ荷生に献じ金陵の回復となる。凱旋し封爵を賜った荷生は癡珠のためにふたりが始めて対面した太原に祠堂を建ててその菩提を弔ったのだった。

魯迅が記したあらすじは、「狹邪小説」に相応しく、韋癡珠と秋痕、韓荷生と采秋のふた組の男女の交情とその帰結に焦点を絞ったものであったが、今回私がまとめ直したあらすじからでも十分読み取っていただけるように、『花月痕』の恋愛ドラマは、国外からの侵入者と国内の反乱勢力の存在、そしてそれらとの戦いが主人公達の人生に大きく関わる形で展開するものであった。

『花月痕』がそのような物語構成を取るようになった理由のひとつは、作品の成立時期に見出す



ことができる。

『花月痕』の現存する最も古いテキストである福州呉玉田刊本（1888年刊）には咸豊戊午の歳、すなわち咸豊八年（1858年）の紀年をもつ「花月痕前序」と「後序」があるものの、その成書年代については、1980年代以降の研究において、『花月痕』全52回は一挙に完成した訳ではなく、まず第44回までが一旦完成し、その後第45回以降が書き継がれる形で成書に至った、という説が唱えられ、現在では広く認められている<sup>13</sup>。ただし、成書年代には諸説あり、起筆は咸豊八年（1858年）であるが、44回までの第1次完成と45回以降の補作の完成については、咸豊八年（1858年）と同治五年（1866年）説、咸豊十年（1860年）と同治七年（1868年）説などが示されている<sup>14</sup>。本稿はそれらの適否について判断する材料も余裕も持たないが、この成立に関わる情報は、上述したような『花月痕』の物語構成——主人公達の人生、運命が国外からの侵入者と国内の反乱勢力の存在、そしてそれらとの戦いに影響される——を理解するうえで重要なヒントを与えてくれることであろう。すなわち、魏秀仁が『花月痕』を執筆していた時分とは、まさに清朝が様々な「内憂外患」に苛まれていた時期であったのである<sup>15</sup>。

「内憂」の最たるものはいうまでもなく太平天国の乱であった。咸豊帝の即位とはほぼ期を一にするように始まったこの乱は同治四年（1865年）まで14年間続くことになるので魏秀仁はその顛末をよく知る得る立場にあった。いや「知り得る」どころか、太平軍の福建汀州への攻撃により実弟を亡くしており、当事者の一人でもあった。『花月痕』の44回分が完成したとされる咸豊八年、十年頃は、北伐軍の壊滅（咸豊五年[1855年]）や内部権力闘争による天京事件の勃発（咸豊六年[1856年]）によりやや勢いが削がれていた太平天国が洪仁玕や李秀成を新たに指導層に加えることで、組織改革を進めるとともに軍事的攻勢を活発化（咸豊六年には杭州、蘇州を占領）させた時期であった。

しかも当時の「内憂」は、この太平天国の乱以外の蜂起、反乱が同時多発する状況でもあった。なかでも捻軍の反乱は太平天国に次ぐ規模の反乱として知られる。19世紀初頭の段階では捻子、捻党と呼ばれ、分散的かつ臨時的徒党に過ぎなかったものが、やがて太平天国軍と呼応しつつ張樂行（張洛行）を盟主に大同団結して組織化を遂げ（咸豊五年[1855年]）、淮南、淮北を中心とする地域を席捲すると、天京事件勃発後は太平天国との連携の度を深め、『花月痕』の44回分が完成したとされる時期まではしばしば作戦行動をともにする関係にあった。太平天国滅亡後は一時勢いを失うものの、太平軍残存勢力と連合軍を組織し、同治五年（1866年）には西捻軍、東捻軍に分裂して抵抗を続けたがともに2年後には平定された。

また、上掲のふたつの反乱と時を同じくするように、陝西、甘肅を中心とする西北地区、雲南を中心とする西南地区で回教徒も一連の大規模な反乱を起こしていた。前者は、乾隆時代の甘肅省における回教徒蜂起と弾圧の記憶が前提となっているといい、陝西では同治元年（1862年）の団練大臣の迫害を切っ掛けに拡大し、同治四年（1865年）それに呼応して甘肅でも蜂起が相次ぐこととな

り、反乱は同治十二年（1873年）まで続いた。いわゆる「陝甘回変」である。後者は、その淵源を嘉慶五年（1800年）の鉅山開発を巡る漢回対立にまで遡り得るが、咸豊六年から同治十三年（1856～1874年）の18年間に及ぶ「雲南回民起義」に拡大した。

さらには、貴州で勃発した張秀眉が率いる「咸同起義」（咸豊四年～同治十二年[1854～1873年]）に象徴される苗族の武装蜂起、咸豊三年（1853年）と翌年に廈門と上海で相次いだ小刀会の起義、乾隆時代以来、武装蜂起を繰り返していた広東地域の秘密結社、天地会の太平天国との連携および昇平天国樹立（咸豊四年[1854年]）と大成国樹立（咸豊五年[1855年]）に至った広西での蜂起等々が歴史年表に見出される。

以上のように、当時には、「内憂」に関して様々な理由、原因を持つ多数の蜂起、反乱を見出すことができるのであるが、一方の「外患」に関しては、咸豊六年（1856年）にイギリスとの間で起こったアロー号事件を契機に翌年の英仏連合軍の広東攻撃によって開始されたアロー戦争＝第二次アヘン戦争をもって、規模のうえでも清朝に与えたダメージのうえでもその代表とすることができる。周知のように、この戦いのなかで咸豊帝は都を捨て熱河への逃亡を余儀なくされ、主を失った離宮、円明園は連合軍の略奪、破壊の対象となるのであるが、この戦争の最も重要な意義は、清朝が戦争処理のために天津条約と北京条約を結び、以後不平等条約体制下に置かれることになった点にある。

事実確認のための叙述がやや長くなったが、『花月痕』はこうした出来事を物語の随所で採り上げ、時にはそれに物語を展開させるための「鍵」となるような役割をも与えているのである。

最も顕著なのは太平天国の乱への言及である。『花月痕』には第4回で員寿泉という名の「粵西巨寇（広東西部の大悪党）」が登場する。この名前は容易に太平天国の首領の洪秀全を想像させるものであるし、また金陵（南京）を「窃拠（占領）」しているとあるのも史実に一致する。さらに第42回では、いわゆる「永安建制」で成立した太平天国指導層の「五王」制、すなわち東王に楊秀清、西王に蕭朝貴、南王に馮雲山、北王に韋昌輝、翼王に石達開を据える体制に対して、それぞれ容易に彼等の名を連想させる羊紹深、刁潮貴、馮雲珊、危鏘輝、席沓開を「五狗」の名をもって配当し、第46回では天京事件以降の太平天国を支えた英王の陳玉成もその綽名「四眼狗」をもって登場させている。これ以上は証拠の列举を控えるが、魏秀仁は極めて強く太平天国のことを意識していたのである。ただし、物語には「太平天国」の表記は現われない。員寿泉本人と彼が率いる反乱勢力は「員逆」という名をもって呼ばれ続ける。その員逆は第42回以降で俄然、存在感を増し、最終局面では5人の「妖婦」の加勢も得て、主人公の一方である韓荷生およびその夫人達と神魔小説張りの戦いを繰り広げる（第48回）が、員寿泉は毒を仰いで死に（第49回）、残党も捕縛され（第50回）反乱は終結する。

捻軍も物語の最終盤に姿を現わし、員逆の頭目のひとりと義兄弟の契りを結ぶ「捻首」の姚薈琳



が登場する（第45回）とともに、捻軍が西捻軍と東捻軍に分かれて抵抗を続けた史実を反映するように北捻と南捻の存在が記されている（第48回）。

太平天国、捻軍に関する記載が物語の第40回目以降に偏るのに対し、物語の冒頭部から終わりに至るまでコンスタントに描かれ続ける「内憂」が回教徒（作品中では「回民、回部、回番」と表記される）の反乱である。上述のふたつの反乱と同様、回教徒の反乱についても『花月痕』は歴史上の「陝甘回変」と「雲南回民起義」の両方を取り上げている。特に前者はふたりの主人公の出会いの一因となる（第2回）など、主人公達の人生と物語の展開に大きく関わる存在となっている。

また、後世いわゆる「咸同起義」の名で記憶されることになる貴州での苗族の武装蜂起についても第49回にはなほだ簡単ではあるが記述がある。

このように同時代の「内憂」を魏秀仁はかなりリアルかつ熱心に作品のなかに書き込むことになったのであるが、他方の「外患」については首を傾げたくするようなキャラクターを持ち出すことになった。すなわち、魏は「外患」を「倭寇」（作品中では多く「逆倭」と称される）として描き出したのである。しかもそれは決して単なる点景としての扱いではなく、物語の冒頭部で、あるいは癡珠と荷生の出会いの淵源となり（第2回）、あるいは「貝賊」、「土匪」、「回番各部」と結託し（第4回）、また後半部では広州から津門への大規模侵略と荷生による掃蕩と慰撫（第47、48、50回）が語られるなど重要な位置付け、役回りを担った形で登場するのである。

この「内憂」に比して時代錯誤もはなはだしい「外患」描写の処理は何故必要だったのか、西洋人の侵略を「倭寇」として描きだすことに一体どのような意味、効果があったのか等々、『花月痕』の「倭寇」については疑問が次々に浮かんできるのであるが、一定の規模を持つ『花月痕』の研究<sup>16</sup>においてこの点への関心は極めて乏しく、唯一台湾の曾世豪氏だけが積極的に言及している<sup>17</sup> 状況にある。曾氏は、『花月痕』が決して「狭邪小説」の範疇においてのみ考察されるべきではなく、中国が直面する危機とその克服の可能性に筆を及ぼしている作品であることを強調し、後者に対しては、西洋列強の侵略の「事実」を中国知識人にとって理想的な文明（中華）と野蛮（夷狄）の関係によって成り立つ伝統的世界観に由来する「想像」によって解釈し直すに当たって、同じ「海盜」であり、また撃退、調伏の対象となった明代後期の「倭寇」を召喚し、それにより結末部で「宇宙清正、夷狄帰化（この世が静謐を取り戻し、夷狄も中華に帰順した）」と謳い上げることが可能になったという解釈を示している<sup>18</sup>。

さて、ようやくここからが本題で、本節で『花月痕』を取り上げた理由となる。

実は、この『花月痕』において倭寇の親玉に擬されているのが女性なのである。すなわち第47回で「這倭夷遠隔重洋，国王是個女主，先前嗣位，年紀尚輕，聽信喜事的人，開了二十余年，所費不貲，漸漸追悔……（この倭夷どもは遠く海の彼方に住まいし、国王は女、かつて位を継いだ当初は、まだ年若かったこともあって、耳障りのよい話ばかり信じていたのですが、侵略が20年ともなりま

すと、ついても莫大となり、ようやく後悔の念に捉われだしました……。』とその姿を現わすのだが、この部分は中国側に「講和」を求める（結局、対等の関係の「講和」は認められず、「招撫」を受け入れることになるが）ために使者を送った場面で語られたもので、その後、第50回でこの「女主」の名が踏裏采であることが明らかになり、その踏裏采は中国から「冊封」され、「夷狄帰化」が達成されることになる。

以上のような倭国の「女主」の存在について、曾氏は、中国の通俗文学作品中に「卑弥呼の残像」を捜し求める私の研究観点に関わる興味深い指摘を行っている。曾氏は彼女を中国に襲いかかる西洋列強のリアルな「女主」であるイギリスのヴィクトリア女王を投影したものと考え、さらに中国がかつて日本の女王＝卑弥呼を「親魏倭王」に封じた記憶を利用して「想像」の世界において優勢な他者を自らの文明の論理に組み込み超克した、というのである。

倭寇の「女主」の名とされる「踏裏采」がどことなく「ヴィクトリア」をイメージさせるところがあることも加え、曾氏のこの見解には大いに傾聴すべきところがあると思う。

このように「卑弥呼の残像」を留めた『花月痕』の成立からおおよそ4半世紀後には、今度は日本が中国のライバルとして立ち現れることになるのだが、その時「卑弥呼」の記憶は中国人によって改めて思い返されることになったのか、それとも新しい事態を前に「残像」は消え去ってしまうことになったのか、そうした疑問を清末小説、戯曲作品や思想文化資料を利用して検討することが次なる課題となるであろうが、その作業については稿を改めたいと思う。

## 注

1. 華瑋、江巨栄『『才子牡丹亭』導言』（華瑋、江巨栄点校『才子牡丹亭』[台湾学生書局、2004年、台北]所収）。
2. 翻訳に当たっては、田中謙二編『中国古典文学大系53 戯曲集（下）』（平凡社、1971年、東京）所収の岩城秀夫訳も参考にした。
3. ちなみに李全と楊婆は実在の人物である。『宋史』巻476、477。
4. 『才子牡丹亭』では、「訶陵」を「詞陵」に誤る。
5. 江巨栄『『才子牡丹亭』の歴史意蘊』（『南京師範大学文学院学報』、2002年第2期）。
6. 『北史』の原文では、本文において引用した部分からかなり行を隔てて「大業三年、其王多利思比孤遣朝貢。使者曰、聞海西菩薩天子重興佛法、故遣朝拜。」と記す。
7. 『才子牡丹亭』では、「四夷志」と表記している。
8. 先行研究（例えば、河内春人『『新唐書』日本伝の成立』[『東洋学報』第86巻第2号、2018年]）によって示されているように、正史の日本伝のなかでも『新唐書』のその「最大の特徴は天皇の系譜記事にある」のだが、その「系譜記事（皇統譜）」とは983年に入宋した日本僧、裔然が宋側から受けるであろう「勘問」に備えて用意していた「王年代紀」に拠ったものである。

9. 清朝において、日本に対する関心が高まり、皇統譜についても参照に足るレベルの資料が整うのは、清末の外交官、黄遵憲による日本情報書『日本国志』の完成（1887年）を待たねばならない。なお、該書の受容が本格化するのには清朝が日本に敗北を喫した日清戦争後のことである。
10. 例えば、我が国の中国文学史、中国小説史では、前野直彬編『中国文学史』（東京大学出版会、1975年、東京）が第8章、清、花柳小説の項において、内田道夫編『中国小説史』（評論社、1970年、東京）がⅥ、阿Qのころ——現代小説への起点——、都会の夜（『海上花列伝』の世界）の項において、それぞれ言及している。
11. 魯迅『中国小説史略』第26篇、清代之花柳小説。
12. 以下、『花月痕』自体については、中華書局、古本小説読本叢刊版（1996年、北京）を使用した。
13. 陳新「魏秀仁の生平及著作考」（『文学評論叢刊』第13輯、1982年）、官桂銓「読《魏秀仁の生平及著作考》」（『文学評論』、1983年第3期）。
14. 潘建国「魏秀仁《花月痕》小説引詩及本事新探」（『文学評論』2005年第5期）。
15. 以下、「内憂」については、以下に記す著述中の関連記述を利用しまとめた。小林一美『清朝末期の戦乱』（新人物往来社、1992年、東京）、並木頼寿『捻軍と華北社会 近代中国における民衆反乱』（研文出版、2010年、東京）、増井経夫『太平天国』（岩波新書、D70、1991年、東京）。
16. 『花月痕』の研究動向については、陳芳華「百年来《花月痕》研究述評」（『遼寧工業大学学报（社会科学版）』、2009年第1期）、王任飛「九十年代以来《花月痕》研究綜述」（『安徽文学』2009年第9期）、翁少娟「新世紀以来《花月痕》研究述評」（『安徽文学』2011年第8期）、劉歆「改革開放以来《花月痕》研究述評」（『現代語文（學術綜合版）』2016年第2期）を参照。
17. 曾世豪「掩影重疊与医国隱喻：《花月痕》中的「逆倭」及時局寄託」（『東吳中文学報』第34期、2017年）、『明清小説倭患書写之研究』（万卷楼圖書股份有限公司、2020年、台北）第5章、第2節、《花月痕》中的「逆倭」与欧州人。
18. 注16、曾2020年。

## 補注

本稿に先立って発表した「卑弥呼の残像（上）」「同（中）」においては採り上げなかったが、「邪馬台国」や「卑弥呼」の記憶を留めた中国の通俗文学作品は他にもあるのでここで紹介する。その作品は、清、乾隆十七年（1752年）に成立した張堅の伝奇作品『梅花簪』で、その第六齣「倭変」において、朝政の弛緩、混乱に乗じて広東を侵略する日本国王、古邪波多尼が盤据する地を「邪焉台国」と設定する。もちろんこの「邪焉台国」は「邪馬台国」の表記ゆれで、物語のなかでは早速「卑弥呼」の記憶と結び付けられることになる。古邪波多尼は次のように語っている。

自漢桓靈時、俺国大乱。有一女子、名曰卑弥呼。年長不嫁、事鬼神有材勇、於是衆立為王。……自女王相繼、伝至晋武太始初年、方伝男王。

漢の桓帝、靈帝の頃、我が国は大いに乱れた。その時一女子がいて、名を卑弥呼といったが、年長けても独

り身のままで、鬼神に仕え才幹と勇力に溢れていた。そこでみなで王位に就けた。……その後女王が続いたが、晋の武帝の太始（?）初年に至り、初めて男王に位が伝わった。

この科白が興味深いのは、お馴染みの『魏志』「倭人伝」からの摘録による引用の前半分に対して、後半部では、物語上、日本を卑弥呼以降当分の間「女王」を戴く国であり続けたとしている点である。

なお、『梅花簪』については、『傳惜華藏古典戯曲珍本叢刊』（学苑出版社、2010年、北京）所収版を使用した。

〔付記〕本稿は、2025年度科学研究費補助金・基盤研究（C）・研究課題「明清時代の通俗文学における日本、日本人イメージの研究」（課題番号22K0036304）の研究成果の一部である。

